

## 一瞬の原爆投下

佐藤 茂（当時17歳）  
札幌市

1945年8月6日、この日はいくつになっても忘れることのできない日である。

6日は朝からとても暑かった。私は旧制中学校を長崎で過ごし、暑さには慣れていたはずなのに、思わず「暑い」と口から飛び出すほどの暑い日であった。当時私は陸軍特別幹部候補生という身分の軍人の卵であった。17歳である。私たちは宇品で横穴式防空壕掘りの作業を毎日続けていた。6日の朝、徹夜の作業を終え、私は宇品から紙屋町方面へ行く電車に乗った。電車内は満員状態で座る席がなく、左手で吊り革につかまり、瀬戸内海側を見ていた。御幸橋を通過した直後である、突然ピカッーと光った。その光の明るいこと、それをどう表現したらよいのか、例えることのできない白に近い色で、生まれて初めて経験した光であった。続いてドーンと響いたものすごい音、これもどう表現したらいいのか落雷などとは比較にならない音であった。ピカッーとドーン、それは一瞬の出来事であった。ピカッーの瞬間、私は思わず右手で後ろ首を押さえたが、その時の熱かったことは熱湯なども問題にならない熱さであった。直接被爆した人はどれほど熱かったことであろうか。次のドーンの瞬間は「やられたー」と口まで出たが、声にならず心で叫んだ。何か行事が順序よく進行しているようだが、すべて一瞬であった。

一瞬の出来事の後、電車が脱線して止まり私も夢中で外へ出た。すると、どうしたのか、朝から目の覚めるような青空であったはずの広島市が真っ暗でないのか。私はしばし呆然として立ち止まったことを思い出す。やがて段々と明るくなり、倒壊した家屋が一面に広がる死の街の広島が見えてきた。

誰かが「俺についてこい」と言った。私は倒壊した家屋の上をよじ登り、声の後ろに続いた。途中多くの人たちと行き会った。みんな異様な

姿をしている。頭や顔から真っ赤な血が噴き出していた。衣服はボロボロで、皮膚は露出し垂れ下がっている。男女の区別もつかない。すぐに広島市内に火の手が上がった。激しい勢いで火の粉が飛ぶ。バリバリと周囲を焼き尽くす。ふたたび市内をさまよって、ある国民学校へたどりついた。そこにはほとんど全裸に近いボロボロの衣服をまとった人たちがあちこちにいた。日が暮れたころ黒い雨が降った。何となく不気味な感じがした。私は黒い雨と遠くで燃えているガスタンクをじっと見つめていた。夜遅く、大声でわめき散らしていた中年の女性が死んだ。

ピカッにやられた左手と後ろ首の熱傷のあとは紫色に盛り上がり、ケロイドが残ったが、満員電車のおかげで命は助かった。しかし、戦後しばらくは放射線による障害がひどかった。身体はいつも疲れてだるく、力が抜けて綿のようにふわっとした状態だった。時折、目の前のものが大きく回転し、立ってられないほどのめまいにも見舞われた。また鼻血は止まりにくく、止血しても数時間は横にならなければならない状態だった。それでも私は幸運にも87歳の今まで生きてきた。生きたくても生きられなかった人々がどれほどの数に上ることか。

誰もが生きる権利をもってこの世に生を受ける。その権利を奪うことは絶対にゆるされない。だから人間が生きている限り戦争があってはならない。ましてや、高齢化した身になっても、原爆の後遺症がいつか私を襲うかもしれないと心配するのは残酷である。だから核兵器は絶対に無くさなければならない。

あれから70年、当時の面影が感じられないほど生き返った広島。しかし、8月になるといまもあの日のことを思い出す。